

MEMO

OSAKA 夢プログラムでは5年間で計2億5000万円を活用し、国内外への遠征や宿泊の費用などを支援。きめ細かくサポートしている。指定競技者は多田、佐藤両選手のほか、100歳で日本人3人目の9秒台出した小池祐貴、十種競技の丸山優真、800位の川田朱夏、マラソンの松田瑞生、短距離の青山聖佳各選手がいる。

なにわから東京五輪に陸上選手を……。そんな大阪陸上界の願いをかなえるために世界を飛び回る人たちがいる。「陸上を通じて大阪を元気に」と夢舞台を目指す選手を支えている。

大阪が支える

6

なにわから五輪選手を 成果着実に

OSAKA夢プログラム 陸上セネラルマネージャー 島津勝己さん



国内外を飛び回る傍ら、中学生の強化練習で元教え子の教諭と指導にあたる島津さん(左)。「能力も性格も違ういろいろな選手の成長を見るのが楽しい」と話す(枚方市で)

陸上界に一流コーチ

けでなく、2月にはニュージーランド、3月には豪州にも出張する予定だ。選手育成に情熱を注ぎ続ける島津さんが陸上と出会ったのは高校時代だ。もともと陸上は苦手だったが、体育教師になるのが夢で、不得手をなくそうと陸上部に入った。大学卒業後、中学で念願の「体育の先生」となり、陸上部の顧問に。教師1年目。大阪の中学生が集う陸上の合宿に誘われ、先輩教諭から聞いた言葉が指導者の道にのめり込むきっかけになった。



「選手に必要なとされるなら、いつでもそばにいてやりたい」と話す小西さん(摂津市で)

「選手は育てるもんや」陸上競技の優劣は素質で決まると信じていただけに目を開かれた思いがした。中学で顧問を続け、その後、国体府代表選手の指導にもかかわった。大阪陸協強化

成果は表れつつある。指定

競技者の一人、多田修平選手(23)は、17年の米岡合宿で男子1000分の元世界記録保持者アサフア・パウエル氏(シヤマイカ)の兄ドノバン氏の指導を受けたことがきっかけで記録を伸ばし、19年の世界選手権ドーハ大会男子4000メートルでは銅メダル獲得に貢献した。府内の大学を卒業後、幼稚園などに勤めながら競技を続けてきた佐藤友佳選手(27)(やり投げ)は19年に世界選手権初出場を果たした。「陸上に専念する時間と環境を作ってくれた。今の私があるのは夢プロのおかげ。自分ひとりの力ではここまでこれなかっただろう」という。資金や技術面で選手を支える夢プロには、心身を支えるトレーナーもいる。府内で整骨院を経営する小西達也さん(40)は選手への海外合宿などに同行して体の管理に気を配るとともに、いろいろな悩みを耳を傾け、心のケアにも尽くす。自身が陸上部に所属していた中学、高校時代はけがに泣かされ、力を発揮できなかった。だからこそ「体に何の不安も悔いもない状態でスターラインに立たせてやりたい」と思う。東京への出場権をかけて正念場の戦いが続く選手たち。夢プロが目標とするのは7人全員の出場だ。「いずれは「陸上」といえば大阪」と言われるくらいにしたい」と島津さん。東京の先に、さらに大きな夢を描いている。(久場俊子)